

電照ギクの異常茎発生に及ぼす施肥量と摘心の影響について

大 島 唯 由・蟹 江 定

(熊本県農業試験場)

電照ギク「秀芳の宝」,「乙女桜」の茎に条溝を生じ、症状が激しいと縦に裂開する異常茎が多発することがある。発生部が切花の中央部にあたるため、切花品質を著しく損ねているので、その対策を知るため、土壌水分、施肥量、摘心回数について検討したので報告する。

試 験 方 法

異常茎発生の多い「秀芳の宝」を用い、8月6日ガラス室のベツに定植、9月1日以降23時から2時まで3時間の光中断による長日条件とし、10月8日に電照を打切った。試験区は、L₈直交表を利用し、土壌水分 pF2.0, 2.5 施肥量多肥 (N, P₂O₅:K₂O 各成分30kg/10a), 少肥 (15kg/10a) 摘心回数1回 (定植後10日), 2回 (定植後10日と25日) 1区1.2m² 30株植えとした。なお施肥は、CDUS 5.5.5 を使用し、1/2 を元肥とし、残量を定植後17日と50日に分施した。摘心後の分枝数は1株当たり3本に整枝した。

試験結果および考察

ガラス室の平均最低夜温は、10月が11.5°C~12.9°C11月が7.0°C~8.5°C, 12月が5.5°C~6.9°Cであった。

pF の推移は、1回の灌水量を5mmとして管理した結

果、pF 2.0区で、1.99±0.15, pF 2.5区で2.4±0.13 となった。

土壌の EC (1:2, 25°C) 及び無機態Nは、多肥区で高い値を示したが、定植後2ヵ月の EC と N は、pF2.0 少肥区<pF2.0 多肥区≠ pF2.5 少肥区<pF2.5 多肥区 の順に高い値を示し、pF2.0 区での減少は、かん水による流亡と考えられた。

開花は土壌水分 pF2.0 区で早咲きとなったが、摘心回数及び施肥量の多少で開花期の差は認められなかった。

異常茎の発生個体数は、摘心処理に顕著な有意差が認められ、2回摘心区で異常茎の発生が著しく減少した。

施肥の効果は、処理間に有意差が認められ、多肥区に異常茎の発生が多く、少肥区で減少した。

なお、異常茎の発生度には、処理間に有意差は認められなかった。また、処理間の交互作用も認められなかった。

以上のことから、異常茎の発生は、多肥により増加し摘心による草勢の調節で抑えられると考えられた。

第1表 異 常 茎 の 発 生 数 及 び 開 花 調 査

要 因	水 準	異常茎の発生個体数 (50本当たり)	左の程度 ※	1本当たりの重さ	葉 数	開花日 (12月)
土 壌 水 分	P F 2.0	16.0	1.8	50.9 g	33.3 枚	20.4* 日
	2.5	18.3	1.7	49.4	34.2	21.6
摘 心	1回	22.0**	1.8	55.0**	37.1**	21.0
	2回	12.3	1.7	45.3	30.4	21.0
施 肥 量	多肥	20.3*	1.9	52.2	34.6	20.8
	少肥	14.0	1.7	48.2	32.9	21.2
L. S. D	5%	4.57	N S	5.06	3.12	0.95
	1%	6.56		8.04	5.72	—

注) ※0:発生なし。 1:茎が扁平となる。 2:茎が扁平となり、わずかに中央が凹む。

3:茎が扁平となり、亀裂が入り割れる。